

『横濱ブラフ六十八番館』

久継遙々

あらずじ

江戸の女大工・はこ（23）（※以降、読み易さの為、ハコと記載）は女であるが故に現場を外され、横濱での仕事の完遂を余儀なくされる。横濱へ向かう途上、攘夷派武士に襲われている通詞見習いの市之進（25）を助ける。男の様に振る舞うハコと、武士らしからぬ市之進は互いに罵り合う始末。

横濱の現場が『山手六十八番館』という異人の家だと知り、戸惑うハコ。市之進はこの家の主・ジョージの通詞として働いていた。大工の棟梁・甚吾郎（50）と佐次（27）が庭の一角に新たな家を建築中。洋館建築に前向きになれないハコだったが、江戸に戻る為、渋々その現場に入る事を決める。

ある日、浮世絵に描かれた開港場の姿に目を奪われたハコは、市之進に山下へ連れて行ってもらう。見るもの全てが新鮮。中でも煉瓦造の洋館に感銘を受け、ハコの仕事振りは以降変わっていく。

ハコと市之進は各々の場所で励むも技術が及ばず落ち込む中、反目しながら二人で話す内、競うように再び前を向こうとする。

ある日現れた市之進の許嫁・加代（19）に結婚を諦めさせようと行動を共にする中で、ハコと市之進は初めて互いを意識、さらに相手の過去を知り、距離を縮める。二人は各々の道で自身の問いに対する答えを探し求めている。

上野戦争を契機に横濱で攘夷派武士による異人襲撃が始まる。ハコは体を張って六十八番館を守り、その際、大工を目指すきっかけとなった父の言動の意味を知る。一方、市之進は、山下の異人避難を助け、その最中、行方知れずとなる。搜索空しく市之進は見つからず、やむなく横濱の仕事を終えたハコは江戸に戻る。

その後、ハコは市之進の生存と留学の決意を知る。それは横濱の騒動とハコの言動に触発され、追い求めている答えを出した末の決断だった。ハコは横濱へ急行、市之進の出航間際に再会、互いに罵りつつも微笑んで別れる。

ハコは市之進が見定めた資質を抛り所に、洋館建築を手掛けつつ、市之進の帰りを横濱で待つのがあった。

登場人物表

はこ(23) (12) 江戸の女大工
木崎市之進(25) 横濱の通詞見習い
甚吾郎(50) 横濱の大工の棟梁
佐次(27) 甚吾郎の元で働く大工
源造(50) 江戸の大工・はこの親方
加代(19) 市之進の許嫁
善助(37) はこの父(故人)
ジョージ(42) アメリカ人商人
キャサリン(38) ジョージの妻
オリバー(8) ジョージの息子
エマ(6) ジョージの娘
武士A・B・C 横濱の攘夷派武士
語学所教師(35) 長崎出身の通詞
ヘボン(53) アメリカ人医師・宣教師
ウイル(45) アメリカ人商人
居留地見廻役
関門の侍
瓦版屋
行商人
御者 英語を話す異人御者
フランス人

○江戸の町

活気のある往来。

T・慶応四年（1868）・一月

○江戸の作事現場

（注）作事＝建築の意。

江戸の町中の現場。

男の大工数名が家を建てている。鋸（のこぎり）で木を切ったり、鉋（かなづち）で木を削ったり、金槌（かなづち）で釘を打ったりしている。大工同士の威勢の良い会話が飛び交う。

その中で女の大工が一人。名は『はこ』（23）。（以降、読み易さの為、片仮名で記載する）

ハコの顔は整っているが、男のなりをし、小柄なため、若い十代男子の大工見習いのように見える。頭には薄黄色の手拭を巻いた鉢巻。（以降、ハコの大工仕事シーンで特に何の記載もしていない場合はこの鉢巻をしている）

ハコは大工の仕事を楽しむかのように周囲の同僚達の仕事を見回し、木の香りを幸せそうに吸い込む。

ハコが金槌を振り下ろそうとしたとき、源造の声「ハコ坊！」

ハコが振り返ると、大工の棟梁・源造（50）が立っている。

ハコ「はい」

源造「ちよっと降りてこい！」

ハコ、源造の元へ。

ハコ「はい、何用で？」

源造「この家の施主の檀那（だんな）がな」

ハコ「？」

源造「女が作ったうちなんかに住めるかって

言つててよ」

ハコ「え？」

源造「まあ、そういうことだ。ハコ」

ハコ「（嫌な予感）……」

源造「外れる」

ハコ「親方あ……」

源造「あ？」

ハコ「何とかありませんか？」

源造「俺たちや檀那の出す金でおまんま食つてんだ。さっさと荷物まとめて帰れ」

ハコ「私だって好き好んで女に生まれた訳じゃない。女だからって途中でおっぽり出されちゃ仕事になりませんって。私は一人前の大工になりたいだけなんだ」

源造「そんなに一人前になりてえか？」

ハコ「はい。あったり前で」

源造「ならどんな現場でも行くな？」

ハコ「勿論！」

源造「よし、決まりだ。お前、横濱へ行け」

ハコ「よ、横濱？」

源造「昔の大工仲間だな、甚吾郎って奴が一旗上げようって横濱へ行った。人手を回せつてうるさくてなあ」

ハコ「それは困ります」

源造「何故だ？」

ハコ「うちが留守になっちまいます」

源造「お前が一人住まいしてる上野の家か」

ハコ「はい」

源造「だったら、暫くお前がいなくたって無くなんねえよ。何てつたつて善助が作った家だからな。奴は良い大工だった」

ハコ「でも……」

源造「でももへったくれもあるか！ とにかく、今ここにお前の仕事はない。また俺の元で働きたけりゃ、横濱で最後まで仕事を仕上げてこい。それまで俺の仕事場への出入りを禁じる。いいな？」

ハコ「そんなあ……」

○上野のハコの家

こぢんまりとした民家だが、仕事が行き届いたしっかりとした造り。旅の格好をしたハコが大工道具を収めた箱を背負って出てくる。家に向かつて手を合わせ、

ハコ「おとつあん、行ってきます」
名残惜しそうに去るハコ。

○街道

ハコが歩いている。

○茶屋

団子を食べて一休みしているハコ。

○野毛の切通

ハコが息を切らして歩いてくる。
視界が開け、横濱を見下ろす形で一望
できる。

ハコ「ここが横濱か……」

横濱は港に張り出した出島のような形
をしており、海には何隻もの巨大な外
国船が浮かんでいる。

ハコは通り掛かった行商人を捕まえて、

ハコ「もし？」

行商人「ん？」

ハコ「ここから見ると山手ってのはどの辺り
になりますか？」

行商人「ほら、あっちに丘があるだろう？」

と出島の外側、右手の丘を指差す。

行商人「あの丘の上が山手だ」

頭を下げるハコ。気を取り直して歩を
進める。

○山手の麓の道（夕）

ハコが歩いてくる。疲れが見える。

市之進の声「（遠くから悲鳴）」

武士Aの声「（遠くから）待てー！」

ハコが振り返ると、木崎市之進（25）
が慌てふためいて走って逃げてくる。
市之進はひよろつとして、いかにも弱
そう。

市之進の後を武士A・B・Cが追い掛
けてくる。

市之進はハコに、

市之進「（息を切らして）た、助けてくれ！」

と言つて、ハコの影に隠れる。

武士A・B・Cが追いつく。

武士A「売国奴め！ お前のような輩がいるからこの国は駄目になる一方なのだ！」

と刀を抜く。

ハコ「ねえお侍さん、何やらかしたんだい？」

市之進「（ハコの言葉は届かない）南無阿弥

陀仏、南無阿弥陀仏……」

ハコ「（溜息）駄目だこりや。なあ、お侍さ

ん方、たった一人相手に穏やかじゃないね

え、何事だい？」

武士A「わっぱには関係ない。そこを退け」

ハコ「わっぱだあ？」

武士A「？」

ハコは大工道具箱から鋸とノミを取り

出して構える。

ハコ「あんたら、こんな弱っちい奴をよつて

たかつて斬ろうなんざ、世知辛い世の中が

許してもこの私が許すかってんだ！」

武士A「何だと？」

ハコ「それにな、こちとら、大工に女は邪魔

でも女だつてこと捨てた訳じゃねえんだ！」

市之進・武士A「お、女？」

武士A・B・C「（高笑い）」

ハコ「な、何がおかしい？」

武士Aは刀を鞘にしまう。

武士A「行くぞ」

武士A・B・C、踵を返し、立ち去る

うとする。

ハコ「おいおい、やんないのかい？」

武士A「武士に女が切れるか。ましてや、女

の影に隠れた奴なんざ、斬る価値もない」

ハコ「てやんでい、女と見くびるな！」

武士A・B・C、去っていく。

ハコ「……まったく、ふざけてやがる。お侍さ

ん、奴ら行っちゃったよ」

と振り返ると、市之進の姿がない。

辺りを見回すと、丘を上がる坂（額坂）

を市之進が歩いている。

慌てて、道具を片付け、市之進を追う

ハコ。

○額坂（夕）

（注）額坂Ⅱ山手の丘の上へ伸びる坂の一つ。

先を歩く市之進に追いつくハコ。

ハコ「ちよっとお待さん、礼の一つもないとは仁義の欠片もない。それでも武家の端くれかい？」

市之進「女の癖に職人のなりなどして、全く柄の悪い奴だ」

ハコ「（カチンと来て）その女に助けってもらった奴がよく言う」

市之進「助けてほしいと頼んだ覚えはない」ハコ「こちとら商売道具で戦おうとしたんだ。親方に見つかれば破門ものだというのに」

市之進「勝手に破門されれば良いではないか」ハコ「何だって？ この青瓢箪め！」

市之進「あ、青瓢箪だと？ 男女（おとこおんな）に言われたくない！」

ハコ「男女だあ！？」

ハコ「市之進を早歩きで追い抜く。」

市之進「お先！」

ハコ「私の行先はこっちなんだ」

市之進「俺の行先こそこっちなだ。男女は別の道を行け」

とさらにハコを追い抜こうとする。さらに対抗して抜こうとするハコ。

○額坂・上（夕）

ハコと市之進が抜きつ抜かれつしながら息を切らして坂を登ってくる。ハコは市之進に勝つことだけに執着し、市之進の行く先についてくる。

市之進「どこまでついてくる？」

ハコ「知るかってんだ！」

○六十八番館・前庭（夕）

市之進が敷地内に入る。それを追うようにハコが入ってくる。六十八番館の母屋の建物がハコの視界に入る。ハコは母屋の前に立ち尽くす。母屋は白木の壁、家自体を取り囲む柵（ベランダ）、緑色の切妻屋根。白人のアメリカ人・ジョージ（42）が母屋から出て来る。

ハコ「！ 異人：：さん？」

ジョージ「（英語で）イチ、遅かったじゃないか。もう日暮れだぞ」

市之進「（以降、英語のセリフは流暢でない感じで）すみません、色々あります」

ジョージ「（英語で）初めまして」

ハコ「えーっと、その：：」

ジョージ「（英語で）君が新しく来た大工か：：随分若いな」

ハコは市之進の袖を引き、二人で話そうとする。

市之進「（英語で）すぐ行きますので家の中でお待ち下さい」

ジョージ、頷いて母屋へ。

市之進「おい、何だ？」

ハコ「ここって異人さんのお屋敷？」

市之進「ああ」

ハコ「山手って、もしかして：：」

市之進「山手居留地。異人の住む家が集まる場所だ」

ハコ「あのさ：：私、山手六十八番館って所に行かなければならないんだけど：：」

市之進「ここだよ」

ハコ「へ？」

市之進「六十八番館」

ハコ「（へたれこみ）嘘でしょ：：」

市之進「どうした？」

ハコ「何かの間違いだ：：私が異人さんの家の作事を：：？ あり得ないって」

甚吾郎の声「何ゴチャゴチャ揉めてるんだ？」

ハコが振り返ると、甚吾郎（50）と佐次（27）が立っている。甚吾郎はいかにもベテランで屈強そうな大工。佐次は二枚目だが無愛想。

市之進「と、棟梁さん」

ハコ「棟梁？」

甚吾郎「おい、ひよつとしてお前か、江戸から源造が寄越したって奴あ」

ハコ「は、はい」

甚吾郎「随分若いな。お前幾つだ？」

ハコ「これでも二十三で」

甚吾郎「（疑いの眼差し）ほお。俺の名前は

甚吾郎。俺のことは棟梁や親方なんて呼ぶ

なよ。親しみと尊敬を込めて甚さんって呼

びな。で、こいつは佐次だ」

ハコ「よろしくお願いします」

と佐次に会釈。

佐次、仏頂面で何も返さない。

ハコ「……」

甚吾郎「で、お前は？」

ハコ「ハコと言います。源造親方からは『ハ

一坊』って呼ばれてました」

甚吾郎、ハコを改めてまじまじと見て、

甚吾郎「お、お前、女か？」

ハコ「（無然と）いけませんか？」

甚吾郎「おいおい、源造の野郎、やってくれ

たな。何の冗談だ？ 女に大工が務まるか

ってんだ」

市之進「お前、大工なのか？」

ハコ「うっさい！ これでも江戸じゃ立派に

大工として働いて……」

甚吾郎「江戸で立派にやってた奴がこんな所

に飛ばされて来るか？」

ハコ「（悔し気に唸る）棟梁……じゃなくて

甚さんも飛ばされてここへ？」

甚吾郎「なめるな。俺は好き好んで来たのよ。

開港場には俺達、日本の大工の仕事が幾ら

でもある。それに、ここは新しく面白

いものが沢山見られるからな」

ハコ「（強がって）私だって同じです」

甚吾郎「（鼻で笑う）まあいい。腕がありや男でも女でも構わん。今日は日も暮れた。明日からあの仕事場に入れ」

と庭の一角に立つ木の骨組み（作事途中）を指差す。

甚吾郎「ハー坊、ここから少し歩くが、元町って所に寝床も用意してある。ついてこい」

ハコ「今作っているあれ、異人の家ですか？」

甚吾郎「ああ」

ハコ「私は日本人が住む、日本の家を建てたいんです」

甚吾郎「ペーペーの癖に仕事を選べると思う

なよ。百五十年早い」

市之進「（ハコに耳打ち）お前、口だけは一丁前だな」

ハコ「（悔しげに唸る）」

甚吾郎「源造は何と言っていた？」

×
（フラッシュ）

源造「横濱で最後まで仕事を仕上げてこい。それまで俺の仕事場への出入りを禁じる。

いいな？」

×
甚吾郎「女大工を門前払いしない俺の了見の

広さに感謝しな」

ハコ「（悔しい）：：お世話になります：：」

市之進「ほう、お前ここに残るのか」

ハコ「うっさい！」

×
甚吾郎「おい、通詞の若えの。お前、名前何て言ったっけ？」

市之進「い、市之進と言います」

×
甚吾郎「お前、ここで俺達大工とジョージさんの間で言葉を訳す役目があるんじゃないやねえ

のか？　こんな仕事終わりの日暮れ時にこのこやっ

て来てどういう見だ？」

市之進「も、申し訳ありません！」

ハコ「襲われてたんですよ、ね、お侍さん」

市之進「しっ！」

×
甚吾郎「ジョージさんとの会話も噛み合わせえこともままあるし、通詞としての力量は

微妙なところだがな」

ハコ「（吹き出す）」

市之進「（悔しそうに呻く）」

甚吾郎「よし、ハ一坊、ついてこい」

ハコ「はい」

立ち去る甚吾郎、佐次にハコが続く。

ハコは市之進にあかんべえをする。

市之進、慚然として母屋へ。

○山手居留地・通り

異人館が立ち並ぶ。

○六十八番館・離れの作事現場

甚吾郎、佐次が大工仕事をしている。

大きめの木材を非力ゆえにフラフラし

ながら運び終わるハコ。へたり込む。

ハコ「（大きな溜息）」

その様子を見て呆れた様子の佐次。

それに気づくハコ。居心地が悪い。

綺麗な洋バラが咲いているがハコは目

もくれない。

市之進とオリバー（8）とエマ（6）

が洋犬と遊んでいる声が聞こえる。

オリバー・エマは市之進のことを『イ

チ』と呼んでいる。

ハコ「遊んでるなんてお気楽なもんだ」

市之進「Come!」

と洋犬に向かって叫んでいる。

ハコ「Comeが『カメ』に聞こえて）どう見

たって亀じゃなく犬でしょうが」

元気なオリバーとエマに振り回される

市之進。息を切らしている。

甚吾郎「おい、ハ一坊！ 油売ってんじゃね

えぞ！」

ハコ「は、はい！」

甚吾郎「やる気がねえなら江戸に帰れ！ お

前の代わりなんか幾らでもいるんだ。別の

奴を源治に寄越させてやる」

ハコ「そんな……」

甚吾郎「源治も顔に似合わず甘え野郎だ」

ハコ「え？」

甚吾郎「その程度の部材を運ぶのによろけてりや世話ねえぜ。大工として体が出来てねえって証だ」

ハコ「それって……」

甚吾郎「女のお前に手加減してたってことさ。

まあ、俺は遠慮しねえから安心しろ」

ハコ「……」

甚吾郎「分かったらさっさと仕事しろ！」

ハコ「はい！」

市之進の声「（鼻で笑う）」

振り返るハコ。市之進が立っている。

市之進「（甚吾郎の真似をして）仕事しろ」

ハコ「うっさい！」

ジョージがやってきて市之進の通訳で

甚吾郎と話し始める。

四苦八苦している市之進。

ジョージは突然ハコにも何か話し掛け、

ハコもあたふたする。

励ますように、市之進の肩をポンポン

と叩いて去って行くジョージ。

甚吾郎「市の字、ここで通詞するなら少しは大工仕事のこと学べ。木材や作事の言葉の意味も知らずに訳すなんて土台無理な話だ」

市之進「はい……」

ハコの声「（鼻で笑う）」

振り返る市之進。ハコが立っている。

ハコ「（甚吾郎の真似をして）学べ」

市之進「うるさい！」

ハコ「異人の子供相手に遊んでばかりいるか

らうまく行かないのさ」

市之進「お前のようにやる気が無い大工が作

った家なんか土台も豆腐みたいなものだろ

うよ。怖くて住めたもんじゃない」

睨み合う二人。

ハコ・市之進「ふん！」

仕事に戻るハコ。

立ち去る市之進。その手元から一枚の

絵がふわりと落ちる。

ハコはそれを拾って見る。横濱開港場の様子を描いた色彩豊かな錦絵で、石造の洋館が描かれている。

ハコ「何、これ？」

市之進「ハマ絵だ」

ハコ「ハマ絵？」

市之進「横濱の姿を描いた錦絵だ」

ハコ「こんな街が横濱に……？」

と目を輝かせる。

市之進「どうした、そんなに穴が開くほど見て。近眼か？」

ハコ「五間先の針の穴だった見分けられるっつうの。それより、市さん」

市之進「市さんって、何だ？俺のことか？」

ハコ「だって、この異人さんらに『イチ』って呼ばれてるでしょうが」

市之進「（唸る）」

ハコ「それより、私をこの絵の場所へ連れてっておくれよ。な、お願い。この通り！」

と真顔で手を合わせ市之進に頼み込む。

市之進「何故行ってみたいんだ？」

ハコ「んー、どうしてかな……？」

市之進「……？」

○谷戸坂

（注）谷戸坂Ⅱ山手の丘の上へ伸びる大きい坂。

人が往来している。

○矢戸橋・関門・外

（注）関門の外を関外、内を関内と呼ぶ。関内と関外は川で隔てられている。

山手側と関内を隔てる川は『堀川』。

矢戸橋は堀川に架かる橋の一つ。

眼光鋭い関門の侍と対峙しているハコと市之進。

関門の侍「よし、通れ」

ハコと市之進は関門に入っていく。

○関内・矢戸橋付近

市之進「ハコと市之進は矢戸橋を渡りながら、野毛からお前が見た出島部分はこのから中だ。出島は川と海に囲まれている」

ハコ「それにしても物々しい関所だったねえ」

市之進「横濱は物騒でな、攘夷派による異人

殺傷はざらなんだ」

ハコ「それで異人さんは拳銃を持ち歩いていてるって訳か」

市之進「俺のように異人と付き合いのある者が標的にされることもある」

ハコ「それで襲われて、女の影に隠れたって訳か（笑い）」

市之進「（慌てて）ほ、ほら、着いたぞ。ここが山下だ。関内ともいう」

ハコ「（笑い）」
ハコは目を見開く。

○同・水町通り

両側に洋館が建ち並ぶ大きな通り。

外国語が飛び交う。

白人、黒人、中国人、東南アジア人などが歩き、帽子を被っている。

白人女性はスカートをはき、日傘を差す者もいる。

白人男性はステッキをついている。

鉄砲を持った軍人も歩いている。

ハコ「なんとけつたいな……」

市之進「ん？」

ハコ「おなごはでかい提灯をはいてるし、雨も降っていないのに傘を差している。それに男は足も悪くないのに杖をついている」

市之進「（笑う）」

ハコ「？」

市之進「二人の背後から近づいてくる馬車の音。市之進「危ない！」

市之進とハコは倒れ込む。

御者「（英語で）危ないぞ！ 気をつけろ！」

勢いよく走り去る馬車。

ハコ「……何、あれ？」

市之進「異国の乗り物、馬車だ」

ハコ「馬車……」

ハコ「海から汽笛の音が聞こえてくる。」

ハコ「何、何の音？」

市之進「と汽笛の鳴る方へ走り出す。」

市之進「おい、ちよつと待て！」

とハコの後を追い掛ける。

○同・海岸通り

道に沿って、片側は海、もう片側に洋

館が建ち並ぶ。

ハコが走って来て、海上を見つめる。

ハコ「何、これ？」

海上に数多くの外国船が浮かんでいる。

圧倒されるハコ。

市之進が息も絶え絶えに合流。

市之進「（息切れ）急に走り出すな……」

ハコ「これって全部、異国の船？」

市之進「ああ。イギリス、フランス、オラン

ダ、アメリカ、イタリヤ、ギリシャ、清国

色々だ。商売船だったり、軍船だったり……

……」

ハコはさらに走り出す。

市之進「おい、今度はどこへ行く？」

と呆れつつハコを追う。

殆どの洋館が石張りな中、一件の煉瓦

造の洋館が浮かび上がるように立って

いる。

引き寄せられるようにその家まで移動。

ハコ「（見とれて）何、これ……」

ハコに市之進が合流。

市之進「（疲れて）おい、お前いい加減にし

ろ……」

ハコは興味深そうに壁面の煉瓦を触つ

たり、叩いたりする。

ハコ「これ、他の建物と雰囲気が違う……」

市之進「おい、叩くのやめろ！」

ハコ「市さん。この壁の、赤くて四角い、石

か焼物みたいなものは何？」

市之進「ブリック、煉瓦だ」
ハコ「煉瓦……じゃあ、この窓にはめられて
いる透き通っているのは？」

市之進「おい、そんな強く叩くなつて。グラ
スは全て舶来品で値が張るんだぞ」
ガラス窓にパリンとヒビが入る。

ハコ「あっ」
市之進「お、おい！ ヒビが入ったじゃない
か。この馬鹿力が！」

市之進「この奥、家の中に異人が見える。
窓の奥、家の中に人がいる！
市之進「うわっ、ほら家の中に人がいる！
ばれる前に逃げるぞ」

とハコの服を掴み、引っ張っていく。
ハコ「おい、引っ張るなつて！」
ハコと市之進は走り去る。

○六十八番館・離れの作事現場
作業に励むハコ。汗を拭い、仕事の合
間に洋バラを見つめる。
ジョージと話し終えた甚吾郎がやって
きて、

甚吾郎「ハ坊、今日は精が出るなあ。目の
色が非番前と違えじゃねえか」
ハコ「少し腑に落ちた気がしましたよ」

甚五郎「ん？」
ハコ「甚さんが横濱へ来た心中が」
甚吾郎「（笑う）まあ励め」
ハコはジョージに握り拳を作り笑顔を
見せる。

微笑むジョージ。
その様子を見つめる佐次。

○同・前庭
オリバーとエマが竹馬や縄跳びで遊ん
でいる。

○同・母屋・廊下
廊下を歩いて来る市之進。
部屋に入ろうとして中の会話が聞こえ、

廊下で身を隠す。

○同・部屋・中

ジョージとウイル（45）が話している。

ウイル「（英語で）もうこんな場所うんざりだ。気候も食事も何もかも違い過ぎる」

ジョージ「（英語で）確かにこの国は下等野蛮だ。だが、そこは俺達が世界標準というものをこの国の田舎者に教えてやればいい」

ウイル「（英語で）おいおいそんなこと言っ

てていいのか？ お前のお抱え通詞が聞い

たらショックを受けるんじゃないか？」

ジョージ「（英語で）奴の語学力じゃ理解で

きないさ。それにお前だって文句ばかりで

はないだろう？」

ウイル「（英語で）奴らが高い授業料払って

くれるお陰で俺達はがっぽり稼がせてもら
ってるしな」

ジョージとウイル、笑う。

○同・離れの作事現場

市之進が肩を落として出て来る様子が
ハコの目に入り、見つめる。

佐次の声「おい、ハコ坊！」

ハコ、振り返り、

ハコ「はい、佐治さん」

佐次「お前さ、真面目に仕事しろよ」

ハコ「え？」

佐次「鉋の掛け方が甘いんだよ」

ハコ「佐次さんのと大差ないと思いますが」

佐次「お前、やっぱり大工向いてねえよ」

ハコ「何だって？」

佐次「だって、俺の仕事との違いが分からね

えんだろ？ それって大工としての力量不

足ってことじゃねえか」

ハコ「（むっとして）佐次さんは女の私が大

工やっつてるのが気に入らないだけでしょ？」

佐次「（溜息）お前は馬鹿なのか？」

ハコ「(憮然として)馬鹿とは何ですか、馬鹿とは！」

ハコの鉋を奪って刃の部分にハコに見せる。

佐次「見ろ。鉋の刃、髪の毛一、二本分出し過ぎなんだよ」

ハコは佐次の指摘に納得がいかない様子。

甚五郎が現れる。

ハコ「甚さんも佐次さんに言っただけで下さいよ。私に絡むなっ……」

甚吾郎「ハハ坊」

ハコ「はい」

甚吾郎「佐次が正しい」

ハコ「え……」

甚五郎、去っていく。

佐次「力は無え、大工仕事も未熟。見た目や言葉を男ぶったってお前は所詮女なんだよ」

ハコ「大工に男も女も……」

佐次「ああ、男も女も関係ねえよ。詰まると

ころ、大工として単に並以下ってことじゃ

ねえか。ガタガタぬかす前に自分の仕事を

きちつとこなしてみろってんだ」

ハコ「(落胆と悔しさ入り混じり)……」

佐次「もういい加減男ぶるな。女らしくして

いれば、お前も中々なもんだと……」

ハコ「え？」

佐次「な、何でもない！ とにかく大工なん

てやめちまえ！」

ハコは肩を落とす。

○語学所・外観(夕)

平屋の屋敷。

○語学所・中(夕)

他の生徒と並んで自習する市之進。

そのそばを通り掛かる語学所教師(3

5、武士ではない)が市之進に話し掛

ける。

語学所教師「(英語で)あなたが勤める異人

の家のビジネスと最近の様子を教えてください

市之進「（英語で）えーと、最近が生糸の値
が上がって……（としどろもどろ）」
語学所教師「（溜息ついて、英語で）向いて
ないよ、あんた」
市之進「え……？」

語学所教師、市之進の脇に置かれた刀
を見て、

語学所教師「もうあんた達の時代は終わった
んだ。英学に全く無用で物騒なそんなもの、
持ち歩いていて恥ずかしくないのか？」

鼻で笑い、立ち去る語学所教師。他の
生徒も笑う。

俯く市之進。
その様子を見つめるへボン（53）。

○山手の丘の上（夜）

ハコが丘の上から下の土地を呆然と見
下ろしている。殆ど真っ暗だが、海際
の山下（外国人居留地部分）は所々灯
が点り、左手の関外の一角、四角形の
土地が明るく浮かび上がって見える。

ハコ「（溜息）」
背後の草むらが音を立てる。

ハコ「誰？」

市之進が姿を現す。

市之進「ん、ん？ ……ハ―坊……か？」

ハコ「市さん？ どうしてここに？」
市之進「お前こそ何故ここに？」

× ×
ハコと市之進が並んで、丘の下を見下
ろしている。

ハコ「あれって？」
と明るく光る四角形の土地を指差す。

市之進「吉原町遊郭だ」
ハコ「ゆ、遊郭……（とどきまぎ）」

市之進「一昨年大火があつてな、それまでは
今より右手、関内に港崎（みよざき）って
遊郭があつた」

ハコ「（平静を装って）へえー」

近くの異人宅から聞こえる笑い声。

ハコ「気楽な人達だね」

市之進「それでもないさ」

ハコ「え？」

市之進「横濱で異人が住めるのは関内の半分

とこの山手だけだ。文化の遅れたこの遠い

国で母国のように暮らせる筈もない。それ

に異人というだけで殺されるかもしれない」

ハコ「だったら来なきやいのに」

市之進「それでも来たい訳があるんだよ。そ

れに、先々考えたら、この国にとっては来

てもらわないと困る」

ハコ「……」

市之進「……いつも威勢だけはいい癖に元氣

ないなんてハ一坊らしくないな」

ハコ「別に……何でもない」

市之進「そうか」

ハコ「そうか、じゃなくてさ、そこはもう少し

し食い下がってさ、悩んでる人間から根掘

り葉掘り聞くもんでしょうが、普通」

市之進「（溜息）面倒くさい奴だな。聞いて

やるからほら言ってみろ」

ハコ「（言いにくそう）……」

市之進「言わないなら帰るぞ」

と立ち去りかける。

話を聞いてほしいハコは慌てて、

ハコ「私の仕事は並以下なんだって」

市之進「……」

ハコ「（投げやりに）佐治さんだけならまだ

しもさ、甚さんまで……みんな女が大工や

つてんのが気に食わないんだ」

市之進「そうか」

ハコ「横濱も江戸と変わらない。同じだ」

市之進「そうか」

ハコ「そうかそうか、って馬鹿の一つ覚えで、

本当に聞く気、あるのかい？」

市之進「（ハコがいつものように食って掛か

つてきたのが面白くなって笑う）」

ハコ「何さ？」

市之進「何でもない」
ハコ「……で、そっちは？」
市之進「ん？」
ハコ「そっちだつて陰気臭い顔引っ下げて、夜更けにこんな所に来て何かあったんでしょ？」
市之進「別に……俺の方は何も無い」
ハコ「私には言わせといて自分は言わないつもり？ 庶民の私には言えないなんて、お武家らしからぬ市さんは言わないよね」
市之進「……」
ハコ「言わないなら帰るぞ（と先程の市之進の台詞を声色とともに真似る）」
と立ち去りかけるが、市之進はハコを止めない。
ハコ「（呆れて）ほらほら、早く言わないと帰っちゃうよ！」
市之進「（仕方なく）この前、ジョージさんと別の異人さんが話しててな……」
× 暗闇に浮かび上がる吉原町遊郭の光。
×
ハコ「あいつらめ、陰でそんなことを……」
市之進「子供達と接している内に大分彼らの言葉が理解できるようになったんだがな」
ハコ「まさか、それで？」
市之進「？」
ハコ「それで異人の子等と戯れて？」
市之進「お前、俺がただじゃれ合ってたとでも……」
ハコ「お、思ってる訳ないじゃないですか」
市之進「……我々は確かに文化的に遅れていくかもしれない。しかし、決して人として劣っている訳ではない」
ハコ「ときっぱり言い返した？」
市之進「……言い返せなかった」
ハコ「どうして？ 私ならがつんと……」
市之進「言いたいことが言えるだけの英語の力がなかった……」
ハコ「通詞なのにな？」

市之進「……俺だって怠けてる訳ではない」と一冊の書物を懐から取り出す。月明かりの元で見ると『英語箋（えいごせん）』と書かれている。

ハコ「何それ？」

市之進「英語の教本だ。これで暇さえあれば学んでいる」

ハコ「でも言い返せなかった？」

市之進「（悔しそうに唸る）」

ハコ「市さんさ、何か怖がってる？」

市之進「怖いって何が？」

ハコ「通詞している市さん見るとさ、遠慮しているというか、腰が引けてるっていうか……」

市之進「（どきっとして）何だと？」

ハコ「踏み込みが足りない気がする」

市之進「……」

ハコ「結局、技術はさ、実地で身に着けるしかない。幾らそんな書物で学んでも……」

市之進「そんなことは分かっている！」

ハコ「だったら、異人相手にも強気に出してみたら？ 私にばかり強気に出さないでさ」

市之進「偉そうに……お前こそどうなんだ？」

ハコ「私？ 私がどうしたってんだい？」

市之進「ただ単に大工として未熟なだけで、

お前の方なんじゃないのか？ 女を言い訳にしているのは」

ハコ「（動揺）佐次さんと同じ様な事を……」

市之進「そうでないと言いつけるのか？」

ハコ「（悔しくて唸る）」

市之進「俺がお前の父親なら娘の大工なんて死んでも止めるがね」

ハコ、俯き、肩を震わす

市之進「（ハコの様子を見て言い過ぎたのではないかと慌てて）おい、ハコ坊……」

ハコ、一瞬涙を拭う仕草。顔を上げ、

市之進をキッと睨み、

ハコ「青瓢箪の市ごぼうに何が分かる！？」

市之進「ご、ごぼう？」

ハコ「ひよろつとしてポキッと折れそうなご

ぼうだ、あんたは！」

市之進「お前な……」

ハコ「侍なら侍らしく、腕つぶしを磨けつてんだ。私があんたの父親ならそうさすね」

市之進「こいつめ……」

ハコ「見てろよ。男も女もない、必ず一人前の大工になってやる！」

とその場を立ち去る。

市之進「俺だって一流の通詞になってやる！」
とハコの後を追うように立ち去る。

○語学所・中

市之進、へボンを見つけ、近づこうとしたところで、語学所教師が立ち塞がり、わざと行く手を邪魔する。

市之進に向けて、疎ましそうに『あっちへ行け』という仕草。

市之進、語学所教師の脇を通り抜けようとしますが、倒され、尻餅をつく。

鼻で笑い、市之進を見下す語学所教師。

市之進、怖気づきその場を逃げ出そうとするが、思い直して立ち上がる。

再び邪魔をする語学所教師を勇気を振り絞り、睨みつける市之進。

たじろぐ語学所教師。

市之進、へボンの元へ。

へボンは市之進を温かく迎える。

語学語教師、悔し気に立ち去る。

市之進は懸命にへボンと質疑する。

○六十八番館・離れの作事現場

大工仕事に励む甚五郎と佐次。

ハコ、車輪の付いた小型の荷車（ハンドキャリーのようなもの）を作っている。

甚五郎が通り掛かり、

甚吾郎「ハー坊、何だ、その珍妙な道具は？」

ハコ「重い物を運び易くしようと思ひまして」

甚五郎「ほお」

ハコ「山下で見た馬車ってやつは、人が乗っ

た重そうな車を馬が引いてました。体の小さい私が引くのに、あんな大きい車は要りません」

甚五郎「なるほどな。お前の体に合わせた、小さい荷車ってことか」

ハコ「へい」

甚吾郎「それなら非力なおめえでも重い物をちったあ運べそうだな。なあ、佐次」

佐次「ふん」

ハコ「ここじゃ、非力非力って言われますが、なりは小さくたって、私もそこいらのへなちよこよりは力ありますよ」

甚吾郎「（笑う）ああ、そうだな」

ハコ「それより甚さん」

甚吾郎「ん？」

ハコ「今建ててる家の外壁はどうするんで？」

甚吾郎「白い板張りにしようと思ってる。母屋みたいな感じにな」

ハコ「それじゃあ燃えちまうでしょ？ 一年、関内は大火で半分燃えちまったとか」

甚吾郎「へえ、横濱に来たばかりで豚屋火事のことなんかよく知ってるな」

ハコ「火事に強い家がいいってジョージさんから要望があつたつて聞きました」

佐次「だつたら、なまこ壁だろう」
と佐次が手を止めて会話に入つて来る。

ハコ「それだとつまらない」

佐次「じゃあ何だと面白いってんだ？」

ハコ「ブリック」

佐次「ブリック？」

ハコ「煉瓦ですよ、煉瓦」

佐次「そんな得体の知れないもの使えるか」
甚吾郎「その煉瓦って奴は何がいいんだ？」

佐次「甚さん？」
ハコ「火に強く、何より見た目が洒落てる」

市之進「市之進が近づいて来て、

市之進「煉瓦なら、山手の麓でジェラールというフランス人の瓦工場が作ってますよ」

甚吾郎「おう、青瓢箪。何処行つてた？」
市之進「山下でジョージさんの生糸の仕事も

手伝い始めたんです」

甚吾郎「お前か？　ハ一坊に入れ知恵したのは」

市之進「何の話です？」

甚吾郎「まあいい。俺達職人はやり慣れたものに固執しがちだ。異国の家作るのだから持ってる腕前で何とかしようとする。その点、ハ一坊、お前はちと違えようだ」

ハコ「甚さん、それじゃあ」

甚吾郎「新たな挑戦、あっぱれだ。ハ一坊、試しにやってみろ」

ハコ「はい！　あとですね、弧の形をした造りや斜めに突き出た壁面など、異人さんのお宅には江戸じゃ見たことない造りが一杯で……」

甚吾郎「分かった分かった。聞いてやるから落ち着け」

市之進「ときに、棟梁さん。そのお手元の瓦版見せてもらってもいいですか？」

甚吾郎「ああ、勝手に見な」

市之進は甚吾郎のそばにあった瓦版を読み始め、難しい顔になる。

市之進「何をやってるんだ？」

ハコ「市さん、何て書かれてるんです？」

市之進「薩長方が江戸に入ったと……」

ハコ「え？」

市之進「今は内輪で争っている時ではない。異人と如何に向き合うかが肝要だというのに！」

甚吾郎「おめえ、侍みたいなこと言うじゃねえか」

ハコ「争うつてもしかして……」

甚吾郎「江戸が戦場になるかもしれねえなあ」

ハコ「それは困る！」

市之進「ハ一坊、どうした？　何が困る？」

ハコ「上野には……私の家があるんだ」

市之進「誰か住んでいるのか？」

ハコ「いや……」

市之進「だったら別に……」

甚吾郎「ハ一坊の大工もあの家から始まって

るもんなあ」
ハコ「（口止めするように）甚さん！」
市之進「？」
甚五郎「おお怖っ。とにかく戦は俺達がここ
で案じてたって止めらんねえよ。仕事に戻
るぞ」
と立ち去る。ハコの立ち去り際、
ハコ「市さん？」
市之進「ん？」
ハコ「市さんはどうして通詞になろうと？」
市之進「一瞬ハコを見つめ、立ち去る。」
その後ろ姿を見つめるハコ。

○モンタージュ

季節は4と5月（和暦でなく西暦）。
ハコは六十八番館・離れの作事現場に
て、甚吾郎・佐次から厳しく指導され
て大変そう。時折落ち込んでいる。
市之進はジョージと日本人商人の商談
の場に立ち会い、苦勞しつつ通訳して
いる。
ハコは六十八番館の母屋を外から興味
深そうに眺めている。前庭で遊んでい
たオリーブとエマに遊んでほしいとせ
がまれ、戸惑うハコ。キヤサリン（3
8）が母屋から現れ、オリーブ・エマ
と一緒に母屋内でのアフタヌーンテイ
ーに招かれる。戸惑いながらも屋内の造
りを興味深そうに観察する。美味しい
お茶に舌鼓を打ち、言葉は通じないが
キヤサリン達と打ち解け始める。
市之進は波止場での積み荷の上げ下ろ
し現場にてジョージと日本人作業員と
の間を苦勞しつつ通訳をする。
その市之進の近くでハコは山下を練り
歩き（ハコと市之進は互いに気づいて
いない）、立ち並ぶ異人館の造りを興
味深そうに観察している。

○貝殻坂・下

(注) 貝殻坂Ⅱ元町から山手の丘の上へ伸びている坂の一つ。

数種類の煉瓦を載せた、ハコ製作の小型荷車(前述)を引いてハコが坂を上がろうとしている。

加代の声「もし？」

ハコが振り返ると、加代(19)が立っている。加代は清楚で育ちが良さそうに可愛らしい女性。着物を着ている。

ハコ「はい、何でしょう？」

加代「この辺りで山手六十八番館という異人

さんのお宅があると伺ったのですけど」

ハコ「それならジョージさんのお宅でさ」

加代「ジョージさん？」

ハコ「お連れします。私の仕事場なもんで」

加代「はあ」

とハコの大工姿を訝しんで見る。

○同・途中

ハコと加代が坂を上っている。

ハコ「これはその煉瓦の見本でさあ」

加代「私とそれほどお歳も変わらないのに大

工として働かれてご立派ですこと」

ハコ「(真剣に)江戸はどんな様子で？」

加代「戦もなく、江戸城は開かれました。皆、

安堵しております」

ハコ「(ほっと一息)良かった」

微笑み合うハコと加代。

○六十八番館・入口付近

ハコと加代が歩いて来る。

ハコ「そのへっぽこ通詞が犬を『カメ』って

言うんですよ。犬が亀な訳ないのにねえ」

加代「(笑う)まあおかしい」

二人、敷地内へ。

○同・前庭

ハコと加代が入ってくる。

オリバー・エマ・洋犬と遊んでいる市

之進。

ハコ「ああ、いたいた。あれがへっぽこ通詞の……」

加代「市之進様！」

加代が市之進に駆け寄って身を寄せる。

市之進「か、加代さん？」

ハコ、市之進・加代と離れた所で、

ハコ「（呆然）……」

甚吾郎の声「おいおい、あんなへなちよこにもこれがいたのか？」

甚吾郎が小指を立てて現れる。

ハコ「（慥然）……」

遠くで市之進と加代が親し気に話し込んでいる。

甚吾郎「ハ―坊。どうした？ お前、顔引き

つつてるぞ」

ハコ「別に！ この顔は生まれつきです！」

ハコ、近くの洋バラを一本ポキッと折って立ち去る。

甚吾郎「そうか、生まれつきか（高笑い）」

遠くで話し込んでいる市之進と加代。

○同・離れの作事現場（夕）

仕事をしている佐次とハコ。

佐次「ハ―坊、そろそろ上がるぞ」

ハコ「佐次さん。私ももう少しやっていきます」

佐次「なあ、ハ―坊」

ハコ「はい？」

佐次「今度、山下の沖合で異人の黒船が花火を打ち上げるらしい。昇天祭がどうだとか」

ハコ「誰が昇天するってんでしょうね？」

佐次「誰かなんてどうでもいい……そのう。

よ、良かったら、俺と一緒にだな……」

市之進が慌ててやってくる。

市之進「ハ―坊！」

ハコ「市さん？」

市之進「困ったことになった！」

ハコ「まあ落ち着きなさいって。今、佐次さ

んと話し中なんです。それで、佐次さん、何

の話でしたっけ？」

佐次「(邪魔が入って悔しげに)もういい！」
と市之進を睨み付けて立ち去る。

市之進「俺、何か悪いことしたか？」

ハコ「さあ……それで市さん、私に何用で？」

市之進「そうだ、困ったことになった！」

ハコ「何の話です？」

市之進「加代さんがな」

ハコ「加代さんってさっきの女の人？」

市之進「そうだ」

ハコ「(小声で)加代さん、ていうんだ……」

市之進「その加代さんがな、俺と祝言をあげ

たいと言ってきた」

ハコ「祝言って……そういう仲……なんだ」

市之進「親同士が決めた許嫁だ」

ハコ「へえ、それは結構なことだ」

市之進「それでな、俺と山下の花火と一緒に

行きたいと」

ハコ「(怒り気味に)行けばいいじゃないで

すか」

市之進「え？」

ハコ「祝言をあげるんでしょ？ だったら至

極当然のことじゃありませんか？」

市之進「何だ、怒っているのか？」

ハコ「怒っちゃいけませんよ。祝言でも旗でも

天麩羅でもあげればいい」

市之進「そんな訳にはいかんだ！」

ハコ「……どうして？」

市之進「どうしてもだ。兎に角、諦めさせね

ばならん。それで加代さんが言うにはだな」

× (フラッシュ) ×

加代「市之進様にいい人がいるっていうなら

私だって野暮なことはしたくありません。

きっぱり諦めます」

× ×

市之進「という話だ」

ハコ「あの……よく話が飲み込めませんが」

市之進「ハハ坊、俺の恋人になつてくれ」

ハコ「は？」

市之進「無論本当の恋人じゃないぞ。振り、

振りでいいんだ。な、この通り！」

ハコ「嫌です！ そんなこと、他の女の人に頼めばいいじゃないですか」

市之進「そんな人がいればお前に誰が頼むか」
ハコ「（まんざらでもない）そう……なんですか……（邪念を振り払うかのように）いやいや、やっぱり御免ですよ」

市之進「ただ、お前のその男みたいななりでは連れて行けん」

ハコ「は？」

市之進「着物はこちらで支度する」

ハコ「私は大工ですよ。この恰好のどこがいけないんです？ 絶対に御免だね！」

市之進「頼む、この通りだ！」

ハコ「絶対に嫌だー！」

市之進「ハコ」

ハコ「何……？」

市之進「新しい鉋が欲しいって言ってたな……」

ハコ「……」

○ 関内・海岸通り（夕）

T・後日、花火の日
人で賑わい始めている。

○ 六十八番館・離れの作事現場（夕）
誰も作業していない。

○ 同・母屋・ある一室（夕）

市之進が椅子に座り、英語箋を読んでは何かを待っている様子。

ドアが開き、スカートを始めとした女性らしい洋服に身を包んだハコが入ってくる。顔も薄っすら化粧している。キヤサリンも入って来て市之進の脇に立ち、市之進と共にハコを見つめる。ハコ、慚然としている。

市之進「（不覚にも見惚れて）……」

ハコ「市さん、（スカート）の両サイドを両手で摘み上げつつ）これってどういう……」

市之進「お前、本当にハー坊なのか？」
ハコ「見たまんま。私は私でしょうよ」

市之進はハコの恰好を得体の知れないものを見るかのように見る。

ハコ「蠅を追い払うような仕草を見せ、
人さんの服なんです？」

キヤサリン「(英語で冷やかすように)あな
たのガールフレンド、可愛いわねえ」

市之進「YES：：(慌てて)な、なに言っ
てるんですか！こいつがガールフレンド
なんて絶対あり得ません！」

ハコ「何、ガールフレンドって？」
市之進「：：馬子にも衣裳って意味だ」

ハコは市之進の背中をバチンと叩く。
市之進「痛え。叩くな。この馬鹿力が」

ハコ「阿呆」

○関内・海岸通り(夜)

凄い人ばかり。日本人も異人もひしめ
くように行き交っている。

帽子を被った洋装のハコと(いつも通
り)和装の市之進が歩いている。

市之進「『象の鼻』という所に加代さんがい
る。そこでお前を見せつけて諦めてもらう。
だからはぐれずについて来いよ」

ハコ「(言いくそうに)ねえ、市さん？」
市之進「ん？」

ハコ「どうして、加代さんに諦めてもらいた
いの？」

人混みに揉まれ、離れ離れになる二人。
ハコ「ちよつと、もう、人多過ぎ。市さん」
と手を伸ばすも市之進は人混みに消え
ていく。

ハコ「ったく：：」
佐次の声「ハー坊？」

ハコが振り返ると佐次が立っている。
佐次「やっと思つつけた」

ハコ「え？」

佐次「それにしてもその恰好……」
とハコの恰好を頭の天辺から足の爪先まで見る。

ハコ「つたく、何で私がこんな格好しなきやいけないでしょうね……でもこれも新しい匏の為。うん！（と自分を納得させるように）」

佐次「（眩くように）悪くない」

ハコ「（よく聞こえなかった）は？」

佐次「（慌てて）いや、何でもない」

ハコ「それにしても佐次さん、どうしてここに？」

佐次「ハコ坊。いや、おハコ」

ハコ「！？」

佐次「これをお前に……」

と櫛を差し出す。

ハコ「私に？ どうしてです？」

佐次「えーと……俺と、その一緒に花火をだな……」

花火が打ち上がり始める。（以降、打ち上がる花火は赤・オレンジ・白で、高度も10メートル程度）

ハコ「（慌てて）あっ、私、行かないと！では、佐次さん、また！」

と立ち去る。

ハコと佐次の間に人が割り込んでくる。佐次「おい、待ってくれ。ほら櫛を持って行け。まだ話終わってないぞ、ああ、もう人が邪魔だー」

○同・市之進付近（夜）

人混みの中でハコを探す市之進。

花火が打ち上がっている。

○同・ハコ付近（夜）

人混みの中で市之進を探すハコ。

花火が打ち上がっている。

○同・象の鼻付近（夜）

（注）象の鼻は弓なりに湾曲した形で

海に張り出した波止場。

花火が打ち上がっている。

人混みをかき分けて市之進が現れる。

市之進「ハコ坊の奴、一体どこへ行った？」

あれだけはぐれるな、と言ったのに」

加代の声「市之進様、来て下さったのですね」

市之進が振り返ると加代が立っている。

市之進「か、加代さん。い、いや、その、私

の連れがいてですね……」

加代「ほほほ、連れなんていらっしやらない

じゃないの？」

市之進「それが、その……」

ハコの声「（小声で）悪い、待たせた」

市之進、振り返るとハコがいる。

市之進「（小声で）遅い！」

市之進、ハコを加代の前に連れ出して、

市之進「ほら、連れなら、ここに」

加代「あら？ 異人さん？ 市之進様は異人

さんとお付き合いを？ それにしても随分

小柄な異人さんね。お顔をよく見せて」

花火が打ち上がり、明るくなる。

加代「あなた、あの時の女大工さん？ あな

たが市之進様とお付き合いを？」

ハコ「ええと、いやあ、そのう……」

市之進「そうです、私はこいつと付き合っ

てるんです！」

ハコ「市さん……」

市之進「ではこの辺りで御免。行くぞ！」

とハコを引っ張っていく。

ハコ「おい、引っ張るなって！」

加代「市之進様！ ちょっと待って下さいま

し！ 市之進様！」

人混みの中に消えていくハコと市之進。

花火が打ち上がる。

○同・玉楠（たまぐす）の木付近（夜）

（注）玉楠の木Ⅱ現在の横浜開港資料館の中庭に残る大きな木。この木のそ

ばで日米和親条約が締結された。

辺りは暗く、誰もいない。

ハコと市之進が駆けて来て、息を切らして立ち止まる。

市之進「（息を切らして）ここまで来たら大丈夫だろう」

ハコ「（息を切らして）この着物、足元は涼しいし、走りづらくて仕方ない（と顔をしかめる）」

市之進「お前に小芝居は無理だったな」

花火が打ち上がる音が聞こえる。

ハコ「ここ、どこ？」

ハコ、暗がりの中に立つ大きな玉楠の木を見上げて、

ハコ「大きい木……」

市之進「ここで日本は国を開く条約をペリーと結んだんだ」

ハコ「へえ……」

玉楠の木を見上げるハコと市之進。

ハコ「ねえ、市さん？」

市之進「ん？」

ハコ「加代さん、可愛くて良い子じゃない」

市之進「ああ」

ハコ「どうして夫婦にならないの？」

市之進「ここ横濱で異人と付き合っている以上、前のようにいつ命を狙われるか……いきなりやもめにする訳にもいくまい」

ハコ「（眩くように）大事に思ってるんだ……」

市之進「ん？」

ハコ「だったら、通詞やめちやえばいいのに。そうしたらさ、異人と一緒に働くこともないし、悔しい思いをすることだって……」

市之進「市之進、玉楠の木を見上げながら、いさかいに巻き込まれて死んだんだ」

ハコ「え？」

市之進「異人とは生まれた国が違えば考え方も違う。せめて言葉が通じれば良いのだが

：：意思疎通がうまく行かないのも当然だ」
ハコ「じゃあ、父上様の無念を晴らそうと通詞に？」

市之進「（唸る）それもあるが：：」

ハコ「：：？」

市之進「父を負かしたいのかもしれない」

ハコ「どういうこと？」

市之進「（苦笑）俺の父は厳しくてな。武芸に励め、武士らしくしろ、と常に言われた」

ハコ「（市之進の父親と同じようなことを市之進に対して言っていたと知り、何も言えなくなる）：：」

市之進「それに見合う力も性分も持たない。役立たず、恥さらし、と日頃から罵られているとな、俺は俺という人間が心底嫌いになつていた」

ハコ「（市之進が自分に自信を持たずにいる理由を知った気がして）そうなんだ：：」

市之進「通詞になつて異人とのいさかいを無くすことができれば、それで命を落とした父を越えた証にできるかもしれない：：と思つたりしてな」

ハコ「敵討ちしながら見返す、か：：」

市之進「だが、何故通詞を目指しているのか、時々分からなくなる：：」

ハコ「：：なりたくないから、じゃないの？」

市之進「（苦笑して）なりたくないのかな？ 心中様々な思いが邪魔をして訳が分からなくなつててな：：」

ハコ「市さん：：」

市之進「迷い子のようで笑えるだろう？ 未熟者の癖に」

ハコ「（真剣に）笑わないよ」

市之進「え？」

ハコ「私もずっと馬鹿にされてきた」

市之進「：：」

ハコ「女が大工なんてやめちまえて。やめろと言われてやめられるなら始めから始めちゃいないんだ！」

市之進「……どうして大工なんだ？」

ハコ「私の江戸の家はね、おとつつあんが建ててくれたんだ」

市之進「お前の上野の家か」

ハコ「おとつつあんの仕事はそれはもう見事なものだった」

○上野のハコの家

家の様子がハコの言葉で語られる。

ハコの声「季節によつて木の状態が変化する。ことや、暮らしている内に生じる建物の歪みさえも考えに入れて建てられていた。広くはなかつたけど、病気のおっかさんが少しでも動きやすいように段差は少なく、間取りも工夫されていた」

○元の玉楠の木付近（夜）

ハコ「家の中になるとね、おとつつあんのあったかい手の平に包まれているような、そんな感じがしたもんだよ」

市之進「……」

ハコ「おとつつあんの仕事の凄さが大工になつて改めて分かつた」

市之進「そんな父親に憧れて大工に……」

ハコ「それだけじゃあない」

市之進「？」

ハコ「その家は病気のおっかさんの為におとつつあんが作つた。でもね……」

市之進「？」

ハコ「間に合わなかつた。家が出来る前におっかさんは死んじゃつた」

市之進「……」

ハコ「それでもおとつつあんは最後まで家を作り上げた……その後すぐおとつつあんも死んじゃつたけど」

市之進「……」

ハコ「おっかさんが死んでから、おとつつあんな、毎晩泣いてたのを私は知ってる。泣きながらそれでも作り上げた『家』というものが何なのか、私にはまだよく分からない」

市之進「お前も答えを探してるのか……」
ハコ「どんなに腕を上げてても女大工に仕事はないかもしれない。そう考えると不安で仕方なくなる」

市之進「……」
ハコ「せめて私なりの強みがあればいいんだけどそんな腕がある訳でもないし……（自虐的に）男大工にまだ肩も並べてないぺえぺえが笑っちゃうよね？」

市之進「（真剣に）笑わないよ」

ハコ「市さん……」
市之進「しかし、もうあるじゃないか、お前しか持っていないもの」

ハコ「え？」
市之進「新しいものに興味を持ち、即取り入れようとする所だよ」

ハコ「（玉楠の木を見上げながら）何がどうなるか分からないものだね」
ハコと市之進、微笑み会う。

市之進「（改めて申し訳なさそうに）今までお前には……」

ハコ「（申し訳なさそうに）私もこれまで市さんには……」

二人同時に頭を下げ、
ハコ・市之進「ごめ……」

火花が打ち上がり、二人の顔が照らされる。

市之進「見に行くか、火花」
ハコ「（微笑んで）うん」

○海岸通り・玉楠の木付近の道（夜）

ハコと市之進が現れる。
甚吾郎の声「おいおい。ハ一坊と青瓢箪じゃねえか？」

振り返ると甚五郎が立っている。

甚五郎「こんな所で逢い引きか？」

ハコ「逢い引き？ ま、まさか！ そんなことある訳ないでしょうが？ これぞと私が認めた人間でなければ夫にはできないんで。

だ、誰がこんな弱っちいごぼうと」
市之進「こつちだつて願ひ下げだ。妻にするならもつと可憐な女性を妻にします！」
ハコ「妻なんか持てないつて言つてた癖に。やつぱり加代さんがいいんだ」
市之進「ああ、加代さんの方が良いに決まつている。言わずもがなだ」
甚吾郎「仲の良いこつて」
ハコ・市之進「良くありません！」
甚吾郎「お前ら、こつちが聞いてもないのに夫婦の話なんかおっぱじめてるぞ」
ハコ「ああ、もう！ 私、帰ります！」
と立ち去る。
市之進「俺も帰る！」
とハコと同じ方向へ立ち去る。
ハコ「ついてくるな！」
市之進「俺の家もこつちだ！」
甚吾郎「立ち去るハコと市之進の後ろ姿を見送りつつ、
甚五郎「（大笑い）」
夜空に大きな花火が上がる。

○六十八番館・離れの作事現場

煉瓦の家が完成しつつある。
ハコ、甚吾郎、佐次が大工仕事をして
いる。
甚吾郎「よし、お前ら。あとひと息だぞ」
ハコ「はい！」
甚吾郎「ハ一坊、（ハコの木材加工を見て）
威勢だけは良いな。それに引き換え、佐次」
佐次は機嫌が悪そう。
佐次「仏頂面して何が面白くねえんだ？」
佐次「（慄然）いえ、何でもありません」
佐次はハコを見る。
ハコは汗を拭いながら、甚五郎がチェ
ックした自身の木材加工を見直し、仕
事を再開する。

○元町

山手麓の日本人街。

瓦版屋の回りに人だかり。瓦版屋は人が斬り合う絵が載った瓦版を見せながら、

瓦版屋「根岸は根岸でも競馬場のある横濱根岸の話じゃありません。江戸の根岸で起こった話。上野の彰義隊と薩摩藩兵が斬るわ撃つわの殺し合いだよ！」

通り掛かった市之進が瓦版を買って読み、不安そうな表情を浮かべる。

○ 関外・吉原町遊郭近くの路地裏（夜）

鳴り響く銃声。

息も絶え絶え、慌てた様子で逃げるフランス人。刀を抜いてそれを追う武士A、B。

袋小路に突き当たる。

フランス人、短銃の引き金を引くも弾切れ。短銃を武士Aに投げつける。

それを避け、刀を振り上げる武士A。

フランス人「（フランス語で）助けてくれ」

武士Aは刀を振り下ろす。

フランス人の断末魔が響き渡る。

○ 六十八番館・前庭

オリバーとエマが自転車の車輪サイズの輪っかを棒で転がす遊びをしている。

○ 同・離れの作事現場

人の姿はない。

完成した煉瓦の家が立っている。斜めに張り出した塔屋等、従来の日本建築にはない造りが施されている。

○ 関内・水町通り（夕）

人が往来し、賑やか。外国語が飛び交っている。

ハコと市之進が歩いている。

ハコは鉋を手にし、嬉しそう。

ハコ「こんな良い鉋が山下で手に入るなんて」

市之進「煉瓦の家の完成祝いも兼ねてな」

ハコ「花火のお礼だったのだし、どうせならあの家を建ててる最中にこれを使ったかったよ」

市之進「そう言うなつて。俺もお勤めで都合がつかなくかつたんだ」

ハコ「ふうん」

市之進「何だ？」

ハコ「気張っているんだなつて思つてさ」

市之進「（照れくさそうに）ふん」

ハコ「近くの洋館の眺めながら、

ハコ「あーあ、ようやく横濱での仕事も終わるか」

ハコ、その洋館の入口のアーチを見つめる。

ハコ「このアーチつて奴は六十八番館では作れなかつたんだよね」

市之進「ハ一坊の性格もこのアーチみたいに少し丸くなればな」

ハコ「ふん」

市之進「まあ、アーチのある家が造れる位になつたら、その家に住んでやってもいいぞ」

ハコ「別に頼んでないし。住んでもらわなくて結構毛だらけ猫灰だらけだよ！」

ハコと市之進、顔を見合せ、吹き出す。和んだ雰囲気を破るかのような銃声。

異人達の悲鳴。

ハコ「え、何、今の？」

市之進「まずい！ こつちへ来い！」

市之進はハコを商館の間の路地に引つ張り込む。

表通りでは異人が刀を抜いた侍に追われいている。

市之進「江戸で御公儀と薩長側とで戦が始まつたんだ」

ハコ「え？」

市之進「江戸の混乱に乗じて攘夷派武士が横濱でも決起するつて噂があつた。取り締ま

りの強い山下で異人が襲われるつてことは、恐らくそれが起こつたんだ」

ハコ「こうしちゃいられない！」

と表通りに出て山手の方へ向かおうとする。

市之進「ハコを止めて、

市之進「おい、どこへ行く？」

ハコ「ジョージさんの家に決まってるでしょ

！」

市之進「江戸はあっちだ！」

と逆方向を指差す。

ハコ「？」

市之進「お前の上野の家が燃えてしまうぞ！」

ハコ「私の家……」

市之進「お前の父親が母親の為に作った、大

事な家なんだから！」

ハコ「……」

市之進「残されるお前の為に最後は命を削つ

て作ったんだぞ！」

ハコ「私の為に……？」

市之進「早く江戸へ戻れ！　だが、戻っても

危険だったら身の安全を第一に考えてだな

……」

ハコ「行かない」

市之進「！？」

ハコ「私は六十八番館へ行く！」

市之進「なんだと？」

ハコ「今はジョージさんの家を守らないとい

けないと思う」

市之進「上野の家は大事じゃないのか？」

ハコ「大事だよ。大事に決まってる！」

市之進「だったら、どうして？」

ハコ「分からないよ、分かんないけどさ」

市之進「！？　女のお前に何が出来る？　六

十八番館へ行つたつて、どうにもならない

こと位分かってるだろう？」

ハコ「私は戦える。誰がごぼうの市さんを助

けてやったと思ってるんだ？」

と大工道具を両手に構えて戦おうとし

た時の格好を真似る。

市之進「しかし……」

ハコ「とにかく今の私はこれしか考えられな

い。私、行くね！」

い。私、行くね！」

とハコは山手に向かつて走り去る。
その時、薄黄色の手拭を落とす。
その手拭を拾う市之進。

市之進「おい、ハコ坊！ 待てて！」

銃声や悲鳴が響き渡る。

逃げ惑う異人達。

市之進「考える：今の俺に出来る事って何
だ？ 俺に出来る事：：出来る事：：」

市之進は何か思いつき、意を決して、
ハコと反対方向へ走り去る。

○六十八番館・敷地・入口（夜）

ハコが息を切らして入ってくる。

○同・前庭（夜）

母屋が大きな炎を上げて燃えている。

ハコ「何てことを：：」

煉瓦の壁面を激しく蹴る音。

武士Aの声「おら、出てこい！」

ハコ、音と声の方へ走る。

○同・離れの煉瓦の家（夜）

武士A・B・Cが煉瓦の家を激しく蹴
っている。

家の中にジョージとその一家がいるの
が窓越しに見える。

窓を割ろうとする武士A。

ハコの声「やめろ！」

武士A・B・C「！」

ハコが武士達と煉瓦の家の間に割って
入る。両手にノミと鋸を手にしている。

ハコ「これは私達が作った家だ！」

武士B「何だ、このちっこいのは。ノミと鋸

で俺達と戦おうってのか？」

ハコ「この家でこれから人が暮すんだ」

武士A「どうせ異人が住むのだろう。俺達は

その異人を斬りに来たのだ。異人がいるか

らこの国はおかしくなった」

ハコ「異人も日本人も関係ない！ 家に住む

のは同じ人間なんだ。はっ（と気づく）」

○（回想）上野のハコの家

ハコ（12）が目を輝かせながら完成した家を見つめている。

ハコ「できたね」

ハコの背後に立ち、ハコの肩に手を置く善助（37）の後ろ姿。

善助「ハコ、家は建てて終わりじゃないんだぞ」

ハコ「？」

善助は薄黄色の手拭をハコに渡す。

（回想終わり）

○元の離れの煉瓦の家（夜）

ハコ、思案している。

ハコM「家は人が住んで初めて家になる。おとつあんは家だけじゃなく、住む人間の人生を作ろうとしていた」

×（フラッシュ）

市之進「最後は残されるお前のために命を削って作ったんだぞ！」

×ハコ「おとつあん：：私、家をただの箱としか考えていなかったみたい：：」

×ハコ、ノミと鋸を構え直し、

ハコ「この家もこの人も私が絶対守る！」

×武士A「よく見れば、お前いつかの女大工か」

×武士Aが刀を抜く。

×武士A「あの時は見逃してやったが異人を守るといふなら、今度こそ容赦はせぬぞ！

死ね！」

×武士Aが刀を振り上げる。

×ハコ、目を瞑る。

×（フラッシュ）
×市之進の笑顔。
×武士Aが刀を振り下ろしかける。
×（威嚇の）銃声が数発。
×居留地見廻役を先頭に、大勢の武装し

た人間が駆け込んでくる。

武士B「だ、誰だ、お主らは」

居留地見廻役「居留地見廻役である」

武士A「異人の犬めが。貴様らも元は幕臣で

あろう。この国を守るべきご公儀の手の者

が何故異人を守るのか？」

居留地見廻役「ご公儀が如何に気を配り、こ

の国の為に異人達を保護しようとしてきた

か、何も知らず、いや、何も知ろうともせ

ず、異人だというだけで排斥しようとする

貴様らには分かるまい。引っ捕らえろ！」

武士A・B・Cが捕縛され、連れて行

かれる。

その場でへたり込むハコ。

煉瓦の家からジョージ・キャサリン・

オリバー・エマが出て来て、ハコに抱

きつく。戸惑うハコ。

ジョージ「(英語で)本当にありがとう。あ

なたの勇気とこの新しい家のお陰です」

ハコ「(動揺して)えーつと、えーつと」

居留地見廻役「あなたに感謝しているのです

よ。あなたがハコさん、ですね？」

ハコ「はい。でも何故私の名を？」

居留地見廻役「ここを守っている女大工がい

ると、我々の番所に通報がありました」

ハコ「市さん：？ その人は今どこへ？」

居留地見廻役「番所を後にし、異人達に声を

掛け、避難を促していたようでした。その

後の消息は不明ですが」

六十八番館を飛び出そうとするハコ。

遅れてやってきた甚五郎と佐次に止め

られる。

佐次「ハコ坊、どこへ行く！？」

ハコ「市さんが、市さんが！」

と暴れる。

甚五郎「いい加減にしろ！」

甚吾郎、ハコを平手打ち。
ハコ、へたり込み、項垂れる。

○山手の丘の上(夜)

見下ろした海際のエリア（山下）の所々が明るい。ぼやが起こっている様子。

○ 関内・水町通り

壊された洋館や地面の血の跡で暴動の跡がうかがえる。
ハコが人を探している。

○ 同・海岸通り

ハコが人を探している。
道端にボロボロになった『英語箋』を見つけ、拾う。
『英語箋』に『木崎市之進』という名が書かれている。

ハコ「市さん……」

○ 六十八番館・前庭

母屋は黒焦げになり、大半が消失している。

○ 同・離れの煉瓦の家

旅支度をしたハコが名残惜しそうに壁面の煉瓦や塔屋部分を撫でている。
ハコが振り返ると、甚五郎・佐次・ジョーじ一家が立っている。

甚五郎は笑顔。

佐次は切なそうに強がった表情。

パキンと何か割れる音。

ハコ「？」

佐次がハコに渡すつもりだった櫛を背後に隠し、真つ二つに割り、それを握り締めている。

ハコはジョーじ一家に抱きつかれ、戸惑い、つつも笑顔で対応する。

× ×

手を振って立ち去るハコ。

洋バラは散ってしまったている。

○ 江戸・日本橋

沢山の人が往来している。

○上野のハコの家

家が焼け落ちてしまっている。
ハコはその残骸の上を歩き、残った柱に触れる。
ハコは手荷物から市之進の『英語箋』を取り出して見つめる。

○江戸の作事現場

ハコを含む数人が大工仕事をしている。
ハコの仕事振りは卒なく落ち着いている。
頭には白い手拭で巻いた鉢巻。(以降、ハコの鉢巻は白)

源造がやってきて、

源造「ハ―坊、お前、随分変わったな」

ハコ「そうでしょうか？」

源造「ああ、色々な意味でな」

仕事に戻るハコ。

佐次の声「(大声で)あおう、ここにハコという女大工はいませんか？」

ハコが振り返ると佐次が立っている。

ハコ「さ、佐次さん？」

佐次「ハ―坊！」

ハコ「どうしてここに？」

佐次「(溜息)やっと思つた。探したぞ」

ハコ「どうしたんです？」

佐次「青瓢箪が見つかった」

ハコ「え？ 市さんが？ 無事なんですか？」

佐次「関外の養生所に入っていたらしい。それで明日、横濱を発って異国へ行くそうだ」

ハコ「え：：：どうしてそんな急に：：：」

佐次「お前には言うな、と口止めされたんだがな：：：」

○(回想) 関外の養生所・外観

中規模の平屋の建物。

○(回想) 同・病室

畳の上に敷かれた布団から半身を起こした市之進。
佐次が傍らで話を聞いている。

市之進「あの日、私は少しでも異人達を救いたいと思いました。それがあの時、私にできることだと思っただけから。しかし、私の拙い英語では限りがありました。結果、彼らを救えなかった。あいつは一番大事なものを捨ててまで六十八番館を守ったというのに……」

市之進の手には、ハコの薄黄色の手拭が握られている。
(回想終わり)

○元の江戸の作事現場

ハコと佐次が隅に腰掛けて話している。佐次「それでも、甚さんづてで聞いた話じゃ、相当数の異人を助けたって話だがな」

ハコ「市さん……」
佐次の話を聞いているハコ。

○(回想)元の病室

市之進「佐次さん、私ね、あいつに『踏み込みが足りない』って言われたんですよ」

佐次「……」

市之進「それにね、自分でもどうして通詞になりたのか訳を探してた。あれこれ考え過ぎててもかえって答えは出ないんだね。色々な過去の感情もやもやするもの全て取っ払って結局残ったのは『通詞になりたい』って思っただけだった」

佐次「……」

市之進「理屈は不要、訳を立てずともよかつたんだ……」

と微笑む。

(回想終わり)

○元の江戸の作事現場

ハコ「……」
佐次の話を聞いているハコ。

佐次「悔しさを糧に異国へ踏み出すんだそうだ。一人前の通詞になる為に」

源造も少し離れた場所から話を聞いて

いる。

ハコ「あの馬鹿！ そんな大それたことを一人で急に決めやがって……」

佐次「ハコ坊……」
ハコ「親方、私！」

と立ち上がり、源造の方を向く。

源造、近づいて来て、

源造「ハコ坊、お前を破門にしてやる」

ハコ「え？」

源造「お前の目指す建物はここにはない。甚吾郎の世話になれ。元気だな、おハコ（わざとハコ坊と言っていない）」

ハコ「親方……（涙ぐみ）今まで本当にお世話になりました。有り難うございました。私、行きます。ここで失礼を」

深々と一礼して駆け足で立ち去るハコ。それを見送る佐次。

○（回想）元の病室

佐次が市之進の胸ぐら掴む。

佐次「あいつだつて女なんだ。あんたが異国に行っている間に誰かと夫婦になっちまうかもしれないねえんだぞ。いいのか？」

市之進「（佐次のハコに対する想いに気づいて）佐次さん……」

佐次「（市之進を睨む）どうなんだ！？」

市之進「（ハコを想いながら）……どのみち、今のままでは……」

佐次「（自分が立ち入れない所でハコと市之進が繋がっていると知り）畜生お！」

と掴んでいた胸ぐらを投げやりに放す。
（回想終わり）

○元の江戸の作事現場

立ち去るハコを見送る佐次。

佐次「（溜息）俺は一体何をやってるんだ？」

源造、佐次の肩に手を置き、

源造「お前、いい奴だな。このまま江戸に残れ。甚吾郎より遥かに腕の良い俺が直々に仕込んでやるよ」

佐次「（苦笑）恐れ入ります……」

○宿場町（夜）

往来に人があり、家々には灯が点つて
いる。
旅の恰好をし、大工道具箱を背負つた
ハコは急ぎ足で歩いている。

○野毛の切通

遠くに出島のような横濱の開港場が見
え、海には多くの外国船が浮かんでい
るのが見える。

○吉田橋

関内と関外を結ぶ最も大きな橋。
異人・日本人関係なく、馬車や人が行
き交う。
関外側から関内に入つていくハコ。
汽笛の音が聞こえる。
ハコは足を速める。

○関内・海に向かう道

ハコが走っている。

ハコ「市さん……市さん……」

○同・象の鼻

ハコが駆けて来る。
海上には大きな外国船が数多く浮かぶ。
象の鼻付近には数多くの小舟が外国船
との間を行き来して、荷を積んだり下
ろしたりしている。
ハコは海上に市之進の姿を探す。
ハコは外国船の方に向かう一艘の小舟
の上在市之進の姿を見つける。市之進
は刀を持たず、鬚も落としている。

ハコ「（叫ぶ）こらあー、市之進！」

○海上の小舟

市之進「ハ、ハ、坊？ 何故ここに？」
（以下、カットバック）

ハコ「（叫ぶ）馬鹿野郎！」
市之進「（叫ぶ）馬鹿とは何だ、馬鹿とは」
ハコ「（叫ぶ）最初から最後まで大馬鹿野郎
だ、侍らしさの欠片もないこの青瓢箪の市
ごぼうが！」
市之進「（叫ぶ）黙れー！ 男女のへっぽこ
大工が！」
ハコ「市さんなんか……市さんなんか……」
市之進「……」
ハコ「（叫ぶ）異国でも何処でも行っちゃまえ
ー！」

ハコの目に涙が光る。
ハコは手荷物から『英語箋』を取り出
して高く掲げる。
市之進はハコの薄黄色の手拭を取り出
して高く掲げる。
小さく頷き合う二人。
市之進は大きな外国船に乗り込む。
（カットバック、ここまで）

○ 関内・象の鼻

海上の市之進を乗せた外国船が汽笛を
鳴らし、出航する。

○ 市之進を乗せた外国船・船上

市之進は薄黄色の手拭を手に持ち、そ
の手を振りながら、
市之進「（叫ぶ）おハコー！」
市之進、微笑んでいる。

○ 関内・象の鼻

ハコは『英語箋』を手に持ち、その手
を振りながら、
ハコ「（叫ぶ）市さん！」
市之進を乗せた外国船が次第に小さく
なっていく。
ハコ、微笑んでいる。

○ 谷戸坂

人と馬車が往来している。

T・慶応四年（1868）・七月
T・江戸は東京と名を改められた。

○横濱のハコの家・作事現場

T・明けて翌年、明治二年（1869）
・四月

建築途中のこぢんまりとした洋館。木の骨組みがあり、近くに少量の煉瓦が積み上げられている。
アーチ状らしき構造が見える。
大工姿でハコは大工仕事中。ハコ製作の小型荷車（前述）がある。
甚五郎がやってくる。

甚五郎「よお」

ハコ「甚さん」

甚五郎「大分、形になってきたな、お前の家」

ハコ「まだまだでさあ、気長にやりますよ」

甚五郎「青瓢箪から便りは？」

ハコ「（微笑んで）ありません」

甚五郎「つれねえなあ」

ハコ「いいんですよ、なくて」

甚五郎「？」

ハコ「励んでる証です」

甚五郎「（微笑み）帰ってきたらここで一緒に暮らすのか？」

甚五郎、ハコを冷やかすように見る。

ハコは温かい眼差しでアーチ部分に手を触れながら、

ハコ「ま、考えてやらなくてもないってとこですか」

甚五郎「（高笑い）時に、この前、フランス

人から教わった技術はどうだった？」

ハコ「（興奮気味に）あれは勉強になりました

た。お陰で次はもつとうまくやれますよ」

甚五郎「実はな、昨日、山下の百二十五番を

請け負った。元町から前田橋渡って、ちよ

つと入った所だ」

ハコ「（訝しむ）へえ？」

甚五郎「ハコ坊、やってみるか？」

ハコ「（驚き）……良いんですか？」

甚五郎 「やりたくねえか？」
ハコ、ぶんぶん首を横に振って否定。
甚五郎 「まずは指図を作ってみてくれ」
ハコ 「（笑顔で）合点承知の助！」

○ 関内・海岸通り・象の鼻周辺
積み荷の上げ下ろし等、皆々活気のある活動をしている。

○ 谷戸坂
人と馬車が往来している。

○ 山手居留地・通り
異人館が立ち並ぶ。

○ 六十八番館・前庭
オリバーとエマが洋犬と戯れている。

○ 同・離れの煉瓦の家
窓ガラスの向こうに見えるジョージと
キャサリン。

○ 山手の丘の上
ハコが眼下の山下を見下ろしている。
海には多くの外国船と小舟が浮かんで
いる。
微笑むハコの手には市之進の英語箋が
握られている。

（了）

参考資料

- 『現代語古語類語辞典』（芹生公男 三省堂 2015）
- 『考証要集』（大森洋平 文藝春秋 2013）
- 『考証要集2』（大森洋平 文藝春秋 2018）
- 『横浜浮世絵と近代日本』（神奈川県立歴史博物館／編 1999）
- 『横浜浮世絵』（横田洋一／編 有隣堂 1989）
- 『横浜の歴史あれこれ Q&A 第3版』（横浜開港資料館 横浜市ふるさと歴史財団 2017）
- 『神奈川県史 通史編4』（神奈川県県民部 史編集室／編 神奈川県 1980）
- 『図説 横浜外国人居留地』（横浜開港資料館／編 有隣堂 1998）
- 『錦絵幕末明治の歴史2 横浜開港』（小西四郎 講談社 1977）
- 『建物が語る日本の歴史』（海野聡 吉川弘文館 2018）
- 『山手の西洋館 外国人居留地の歴史的景観』（横浜歴史資産調査会 2013）
- 『日本の近代建築 上 幕末・明治篇』（藤森照信 岩波新書 1993）
- 『時代小説がもつとわかる！江戸「仕事人」案内』（岡村直樹 天夢人 2018）
- 『“通訳”たちの幕末維新』（木村直樹 吉川弘文館 2012）
- 『浮世絵で見る幕末明治 東京・横浜開花絵（マスプロ電工美術館コレクション）』（町田市立博物館 1984）
- 『パノラマ浮世絵「幕末・明治の東京・横浜風景」』（岩切信一郎 阿部出版 2019）
- 『知って合点 江戸ことば』（大野敏明 文藝春秋 2000）
- “山下居留地遺跡プロムナード”にある「VII・居留地建築の断片」というプレート

横浜絵

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%A%E6%B5%9C%E7%B5%B5>)

上野戦争

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E9%87%8E%E6%88%A6%E4%BA%89>)

江戸から東京へ

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%9F%E6%88%B8#%E6%B1%9F%E6%88%B8%E3%81%8B%E3%82%89%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E3%81%B8>)

江戸開城

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%9F%E6%88%B8%E9%96%8B%E5%9F%8E>)

横浜港の発展

(<https://smtrc.jp/town-archives/city/yokohama/p03.html>)

港崎遊郭

(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B8%AF%E5%B4%8E%E9%81%8A%E9%83%AD#cite_note-6)

二つの謎をさぐる 開港場建設と居留地整備
に関するエピソード

(<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/journal/099/02.html>)

建設人材革命の時代

(https://www.mlit.go.jp/hakusyo/kensetu/h12_2/h12/html/C1232A00.htm)

鹿島の軌跡 第2回 江戸から横浜へ

(<https://www.kajima.co.jp/gallery/kiseki/kiseki02/index-j.html>)

東海道の誘い 旅にしよう

(https://www.ktr.mlit.go.jp/yokohama/tokaido/02_tokaido/04_qa/index4/answer1.htm)

横浜開港場における英語教育

(https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/uploads/2021/01/kyouudo_kanagawa055_gonda.pdf)

横浜浮世絵展の異国情緒溢れる錦絵が面白い！その不思議な魅力を徹底レポート【展覧

会レビュー・感想・解説】

(<https://intojapanwaraku.com/art/6714/>)
MASPRO ART MUSEUM 横浜開花絵 展示
作品

([https://www.maspro.co.jp/museum/collecti
on/collection_cat/yokohama/](https://www.maspro.co.jp/museum/collecti
on/collection_cat/yokohama/))
レファレンス事例詳細『質問：横浜市山手の
居留地の地番について、歴史的な変遷を知り
たい』に対する回答

([https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3
ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=
1000149900](https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3
ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=
1000149900))

銅製新調横浜細見之図 YOKOHAMA OF
HAP

([http://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archiv
e/dev/IndexServlet?mode=1&id=12127&r=0
&x=0&y=0&uniq=1376039706490](http://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archiv
e/dev/IndexServlet?mode=1&id=12127&r=0
&x=0&y=0&uniq=1376039706490))

『関門は関内のはじまり』谷戸橋
([https://bropota.hateblo.jp/entry/2018/12/0
2/kannon/](https://bropota.hateblo.jp/entry/2018/12/0
2/kannon/))

花火を描いた浮世絵

(<https://youtu.be/oNEhkQ0n8rQ>)

以上